

# 清原宣賢自筆『日本書紀抄』(後抄本) 本文傍訓の声点が 反映するアクセントについて

坂水貴司

## 一、問題の所在と本稿の目的

天理大学附属天理図書館蔵清原宣賢自筆『日本書紀抄』(後抄本)  
(以下、単に『日本書紀抄』と呼称する。)は『日本書紀』神代巻を  
原典とする抄物であり、講義の手控に属する。この『日本書紀抄』  
は、原典とする『日本書紀』本文を引用する部分と、本文に注釈を  
加える部分とに分けることができる。そして、『日本書紀抄』に引  
用される『日本書紀』本文には振り仮名やヲコト点の他、多数の声  
点が付点されている。

『日本書紀』古写本に付点される声点は、アクセント史研究の資  
料として用いられてきた。このうち『日本書紀』神代巻には、鈴木  
豊氏によって次の箇所に加点されることが指摘されている。<sup>②</sup>

- (a) 本文の万葉仮名
- (b) (a)以外の本文(①訓で読むもの、②音で読むもの)
- (c) 傍訓の片仮名
- (d) 「乾元本」所引『日本紀私記』

この鈴木論文では、(a)(d)の声点は平安中・後期のアクセントを反  
映し、(b)のものも(a)(d)の付点年代に準ずるものであるという。た  
だし、(b)のうち①については、後世に増補されたものも含まれている  
という。そしてこれらを除いた(c)の声点は、諸本間で内容が大きく  
異なっていることが指摘されている。

『日本書紀抄』に引用される『日本書紀』には、この鈴木論文で  
分類された声点のうち、(a)(b)(c)の声点が存する。これらの声点のう  
ち(a)の声点は諸本とよく一致し、移点によるものであることが確認  
される。<sup>③</sup>(b)の声点の諸本との比較は現在のところ試みていない。し  
かし、(b)の声点のうち音で読むものは、他本と同様に『廣韻』の  
調とよく一致した。<sup>⑤</sup>鈴木論文で、諸本間の異なりが指摘される(c)の  
声点(以下、傍訓の声点と呼称する)は、『日本書紀抄』ではどの  
ような様相を呈するのであろうか。

- (a)(b)の声点と本文傍訓の声点とを比較すると、両者が同一のア  
クセント型でなく、新旧の關係にもない例が見られる。そこで、(a)
- (b)と本文傍訓の声点とは一旦別個に考え、『日本書紀抄』本文傍訓  
声点の示す動詞のアクセント体系を纏めてみると、表1のように

なった。<sup>⑦</sup>

表1

五		四				三				二				一	音節数		
高起		低起		高起		低起		高起				低起		高起		低起	型
下二	四	四	下二	四	上二	四	サ変	下二	上二	四	下二	四	下二	四	カ変	種類	
						○ ●		● ● ○		● ○					○	未然形	
	● ● ● ○		● ● ○	● ● ○	○ ○			● ● ○	● ○	● ● ○ ○	○	○	● ●	○		連用形一	
		○ ● ● ○	● ● ○ ○	● ● ○ ○	○			● ○	● ○	● ○		○	●			連用形二	
	● ● ● ○		○ ● ● ●	● ● ○ ●					● ○	● ●				●		終止形	
● ● ● ●					○ ○							○				連体形	
										● ● ○		○	●			已然形	
										● ○ ○						命令形	
					○ ●		● ●									特殊形	

表1に示したようなアクセント体系は、どの時代にも見られない。なぜ、このようなアクセントを示す声点が加えられるのであるか。

『日本書紀抄』本文傍訓の声点は、内山弘氏によって詳細に検討されている。この内山論文では、次のような結果が示された。

(1) 語頭低音連続が多く解消されるが、一部には語頭低音連続型が残ることから、南北朝以前の古いアクセント体系を反映する声点(少)と、それ以降の新しいアクセント体系を反映する声点(多)が混在する。

(2) 卓立型(●○●)のような型が存在することから、傍訓の声点の示すアクセントのうち、新しい声点は室町時代初期頃のアクセントを反映する。

(3) ●○●型の回避例が見られる。

このように内山論文では、『日本書紀抄』本文傍訓の声点は、「古いアクセント体系」「新しいアクセント体系」の二種のアクセント体系を想定されている。ただし、「何故両者の声点が共存し得たのか」という問題は残るとされた。

本稿は、先行研究で指摘された「古いアクセント体系」「新しいアクセント体系」を手がかりに、『日本書紀抄』本文傍訓の声点が反映するアクセントについて検討することを目的とする。

## 二、研究の方法

アクセント体系変化の代表的なものに、語頭の低拍連続が高起式

に変化するものがある<sup>9)</sup>。本稿ではこれに着目し、内山論文でも取り上げられた次の二点について検討したい。

(1) 語頭低拍連続を保持する例

(2) ○○○↓●○○○の例

(1)の語頭低拍連続は、アクセント体系変化前の特徴を示すものである。これについては、『日本書紀』神代卷諸本と比較することによって、諸本の傍訓声点との関係を調べる。比較には鈴木豊編『日本書紀神代卷諸本声点付語彙索引』(一九八八年、アクセント史資料研究会)を用いる。対象となっている諸本は「鴨脚本」「弘安本」「乾元本」「図書寮本」「嘉暦本」「明德本」「丹鶴本」の諸本である。これら諸本の解説については『日本書紀神代卷諸本声点付語彙索引』に譲り、書写年代のみを記す。

「鴨脚本」 …… 嘉禎二(一二三六)年写

「弘安本」 …… 弘安九(一二八六)年以前写<sup>10)</sup>

「乾元本」 …… 乾元二(一一三〇三)年写

「図書寮本」 …… 南北朝頃写

「嘉暦本」 …… 嘉暦三(一一三二八)年写

「明德本」 …… 明德二(一一三九一)年写

「丹鶴本」 …… 嘉元四(一一三〇六)年、神祇伯家本の書写本の模刻

(2)は、アクセント体系変化の中で○○○↓●○○○↓●○○○と変化したものである。これは、体系変化前の○○○型および変化過程の●○○型、さらに変化後の○○○型の三種を探し、それぞれについて検討していく。

### 三、研究結果

#### 1. 語頭低拍連続を保持する例

語頭の低拍連続を保持する例は、表2の通りである。<sup>11)</sup>「アナウレシエヤ(喜哉)」の例は「アナ」「ウレシ」の二語が語頭低拍連続型であるため、二語として扱うべきかもしれない。しかし、ここでは他本との比較の都合から、一例として扱っている。また「クハシクタヘナル(精妙)」「マサヤアカツク(正哉吾勝々)」の例も、同様に一例として扱った。このことによって本稿の結果に影響はないものと思われる。

表2

○○	メラ(陰陽) [上10オ2]
○○○	ツヅキ(淹) [上11オ5]、イロト(妹) [上24ウ8]、ツミバ(罫) [上40オ7]、サ、キ(鶴鶴) [下7オ8]、ウマシ(可美) [上21ウ1]
○○○○	アワナキ(沫蕩) [上17ウ9]
○○○●	ウヒチニ(泥土煮) [上16ウ7]、ク、ノチ(匂々廻馳) [上28オ10]
○○○×	スヒチニ(沙土煮) [上19オ5]
○○●●	スヒチニ(沙土煮) [上16ウ7]

○×××	ク、モリ（溟滓）「上10オ2」
○×●●	ユバリマル（放尿）「上42ウ6」
○○○○×	アヲウナハラ（滄溟）「上19ウ1」
○●●×	ヲノゴロジマ（駸駸盧鳴）「上19ウ2」
○○○○○●	アナウレシエヤ（喜哉）「上21ウ1」
○●○○××	クハシクタヘナル（精妙）「上11オ10」
○●×●××	マサヤアカツく（正哉吾勝々）「下2ウ3」

（以上一八例）<sup>12</sup>

これらの例を、(1) 他本とアクセントが一致する例、(2) 他本とアクセントが一致しない例、(3) 『日本書紀抄』のみに加えられる例の三種に分けて考えてみる。用例数はそれぞれ一一例、四例、三例であり、偏りがある。この偏りは『日本書紀抄』本文傍訓の声点全体を(1)～(3)に分類したときの、それぞれの全体の用例数の差に起因するのかもしれない。そこで、全体の用例数に対する語頭低拍連続型の用例数を調査した。用例数は、次の通りであった。語頭低拍連続型の用例数／全体の用例数で表している。

- (1) 他本とアクセントが一致する例 11／59
  - (2) 他本とアクセントが一致しない例 4／97
  - (3) 『日本書紀抄』のみに加えられる例 3／298
- (1) は全体の用例数が少ないにもかかわらず、語頭低拍連続型が一一例と、(1)～(3)の中では最多である。(3) は、全体の用

例数が三○○例に近いものの、語頭低拍連続型は三例と最少であることから、語頭低拍連続型の用例数の偏りは、全体の用例数に起因するものではない。

以下、それぞれについて考える。

(1) 他本とアクセントが一致する例

これらの例のうち、声点を示すアクセントが『日本書紀』諸本と一致する例を次に挙げる。いずれか一本と一致していれば一致していると思なし、挙げていく。諸本の声点を示すアクセントも、ともに載せる。

メヲ（陰陽）

書紀抄「上10オ2」○○  
 弘安 「一3」 ○○  
 嘉暦 「一3」 ○○

ツヅキ（淹）

書紀抄「上11オ5」○○○  
 弘安 「一5」 ○○○  
 嘉暦 「一5」 ○○○

イロト（妹）

書紀抄「上24ウ8」○○○  
 弘安 「一97」 ○●  
 乾元 「一100」 ○●  
 嘉暦 「一94」 ○○○

ウマシ(可美)

ウヒチニ(渥土煮)

スヒチニ(沙土煮)<sup>14</sup>

ク、モリ(溟滓)

ヲノゴロジマ(礮馭盧嶋)

書紀抄[上21ウ1]	○○○○
弘安 [二66]	○○○
乾元 [二71]	○○○
嘉曆 [二65]	○○○
書紀抄[上16ウ7]	○○○○●
弘安 [二54]	○○○●
乾元 [二43]	○○○●
嘉曆 [二54]	○○○●
書紀抄[上19オ5]	○○○○×
弘安 [二55]	○○○●
乾元 [二60]	○○○×
嘉曆 [二55]	○○○●
書紀抄[上10オ2]	○○○×
乾元 [二4]	○○○
書紀抄[上19ウ2]	○○○○○
弘安 [二62]	○○○●
乾元 [二67]	○○○●
嘉曆 [二61]	○○○●

アナウレシエヤ(喜哉)

クハシクタヘナル(精妙)

マサヤアカツく(正哉吾勝々)<sup>15</sup>

書紀抄[上21ウ1]	○○○○○○○●
弘安 [二66]	○○○○○○●
乾元 [二71]	○○○○○○●
嘉曆 [二70]	○○○○○○●
書紀抄[上11オ10]	○○○○●×××
弘安 [二5]	○○○●×××
乾元 [二5]	○○○●×××
嘉曆 [二5]	○○○●×××
書紀抄[下2ウ3]	○○○○○●××
弘安 [二3]	○○○●×××
嘉曆 [二3]	○○○●×××

(以上一一例)

他本のいずれかと一致すれば、一致していると判定したのであった。しかし、多くの場合は複数の諸本と一致している。さらに、「クハシクタヘナル(精妙)」のような部分差声例で、他本と差声箇所さえ重なる例もある。

これらの例から考えるに、複数の古写本で一致する声点は、伝承によって複数の『日本書紀』神代巻に広がるものであろう。

他本と一致する例は、語頭低拍連続型全一八例のうち一一例を占める。語頭低拍連続型の多くが移点によるものであると考えられる。

(2) 他本とアクセントが一致しない例  
 他本の声点と『日本書紀抄』の声点とが異なっている場合もある。次の例である。

ツミバ(鐺)

書紀抄「上40オ7」	○○○
弘安	「228」 ○●●
乾元	「237」 ○●●
嘉暦	「219」 ○●●
書紀抄「上16ウ7」	○○●●
弘安	「41」 ○●●●
乾元	「43」 ×○○×
嘉暦	「41」 ○●●●

スヒチニ(沙土煮)

書紀抄「上17ウ9」	○○○○
弘安	「49」 ○●●●
乾元	「53」 ○●●●
嘉暦	「49」 ○●●●
書紀抄「上19ウ1」	○○○○○×
弘安	「60」 ○●●●×
乾元	「65」 ○●●●×
嘉暦	「60」 ○●●●×

アワナキ(沫蕩)

書紀抄「上19ウ1」	○○○○○×
弘安	「60」 ○●●●×
乾元	「65」 ○●●●×
嘉暦	「60」 ○●●●×

(以上四例)

『日本書紀抄』で語頭低拍連続型であるこれらの例は、諸本でもほとんどが語頭低拍連続型である。

「ツミバ」「スヒチニ」「アワナキ」の例を見ると、これらの声点は誤点であるとも言えそうである。しかし、単純にそうとは言えない。

い。「アヲウナバラ」のように、体系変化前のアクセントに類例が求められるものも存するためである。

「アヲウナバラ(滄溟)」は、古今和歌集声点本の例が秋永一枝氏によつて検討されている。アクセント体系変化前の資料と認められる京都大学附属図書館蔵『古今秘注抄』(以下『京秘』と称す)に、『日本書紀抄』と異なるアクセント型である「あをうなばら(青海原) × × ○ ○ ○ ● ●」の例がある。これについて秋永氏は、「うな原」のアクセント型には ○ ○ ○ ● ● ・ ○ ● ○ ○ 両型が存在していたと推定している。

『京秘』の定家仮名遣いはアクセント仮名遣いであることが確認されているから、「あをうなばら」である『京秘』の第二拍目は●となり、『日本書紀抄』と合わない。しかし、「アラ」は低起式○○の例も高起式●●の例も存在が確認され、低起式の場合には規則的な複合を示すことも明らかにされている。以上のことから、『日本書紀抄』本文傍訓の声点に見られる「○○○○○○×」型は存在し得たであろう。

このように考えると、諸本で一致しない例について短絡的に誤点と解釈することは危険である。

(3) 『日本書紀抄』のみに加點される例

『日本書紀抄』のみに語頭低拍連続型が見られ、他本には同一箇所の声点が加點されない例が三例ある。

サ、キ(鷓鴣)	「下7オ8b」 ○○○
ク、ノチ(句々廻馳)	「上28オ10」 ○○○●

ユバリマル（放尿）「上42ウ6」 ○○×●●

（以上三例）

古く「おほさざき」であった「サ、キ（鶴鷄）」は、院政期頃には清濁やアクセントが不明となったという。そのため一定しなくなったアクセントの中に、○○○型も現われることが、秋永一枝氏によって確認されている。

「ク、ノチ（匂々廻馳）」は、神名である。他の文献に声点加點例が出現しないため、この例については立ち入ることができない。「日本書紀抄」本文の万葉仮名に加點される圈点（前掲鈴木論文の、(a)の声点）では、「●●●○」という型で加點されており、当該例の「○○○○●●」とは関連性が見られない。

「ユバリマル（放尿）」は、乾元本の他所で「○○●●○○」「1210」と加點される。なぜ『日本書紀抄』でこのように加點されるのか、わからない。誤点であろうか。

#### （4）まとめ

以上より、語頭低拍連続型は『日本書紀』諸本とアクセント型が一致する例に集中していることがわかった。しかし、(2)(3)で確認されたように、他本と一致しない例や『日本書紀抄』のみに加點例が見られるものについても語頭低拍連続型が存することは、無視できない。

これは、『日本書紀抄』が典拠とする『日本書紀』本文が、今回比較した諸本とは様相を異にしていたためであると考えられる。

『日本書紀』古写本の傍訓の声点は、「日本紀講書」の和訓に加點さ

れた声点に由来すると考えられている。これが傍訓に取り入れられて書写・移点されるうちに、その声点は誤点やアクセント変化の反映をうけたという。<sup>19)</sup>その過程で、『日本書紀抄』が典拠とする『日本書紀』傍訓の声点は、今回比較に用いた他本と異なる様相を見せていった、と考えるべきであろう。

#### 2. ○○○↓●○○の例

次に○○○↓●○○の変化について考える。これは、変化前の○○●●、変化の過程を示す●●○○●●、変化後の●○○○の三種に分けて考える。

#### （1）○○○○（変化前）

体系変化前の型である○○○○型は、『日本書紀抄』本文傍訓の声点には見つかからない。

#### （2）●○○●（変化の過程）

○○○↓●○○○の変化の過程を示しているとされる●○○●型のアクセントは、『日本書紀抄』本文傍訓の声点に例が確認される。●○○型の体言は次のようである。

- ①アロジ（主人）、「下47ウ4」、②ヲホチ（大鈎）、「下48オ5」、③ユハズ（弓彌）、「中2オ4」、④アヅミ（阿曇）、「上45ウ2」、⑤クマヂ（隈）、「下10オ10」

（以上五例）

それぞれの例について考えてみる。

①主人：御巫本『日本書紀私記』に○○●の差声例がある。

②大鈞：御巫本『日本書紀私記』に○○●の差声例がある。

③弓彌：『日本書紀』人皇巻に○○●の差声例がある。<sup>20)</sup>

④阿曇：嘉暦本同一箇所に○○●の差声例がある。

このように①から④は、体系変化前のアクセントを示すとされる資料に○○●型のアクセントが実現している。○○●↓○○○の変化過程と考えて無理がなさそうである。

⑤の「クマヂ」は、乾元本巻第二、八九行目に●●●の差声例がある。秋永一枝氏によると、古くは●●●であった「隈(くま)」は、『毘沙門堂本古今集註』では●●●が見られるという。このことについて秋永氏は、

『毘』本の系図の末に現われる「慶盛」は正平年間に活躍した歌僧(中略)であるから、南北朝期には●○型に移行しつつある、その新しいアクセントが混入したことも考えられる。<sup>21)</sup>

とされた。例から、「クマ(●○)」のアクセントが示す時代について、詳しくわからない。しかし、「クマヂ」の●●●型についても、「クマ」の新しいアクセントである●●●の影響を受けたと考えるべきであろう。従って、○○●↓○○○の変化過程に位置づけられる例ではない。

動詞・形容詞では次のようである。

- ⑥ハタラ(償) 「下46オ7」、⑦モダサ(黙) 「上51オ6」、⑧カブシ(頗傾) 「下17オ9」、⑨カヅキ(潜) 「上45オ8」、⑩ナジリ(詰) 「中2オ6」、⑪ホセキ(防) 「下28ウ9」、⑫モヂフ(捫) 「下53オ6」、⑬ハゲシ(慷慨) 「下9オ3」

それぞれの例について検討してみる。

(以上八例)

⑥ハタラ(償) …… 図書寮本『類聚名義抄』○×●

御巫本『日本書紀私記』○○●

⑧カブシ(頗傾) …… 御巫本『日本書紀私記』○○●

⑨カヅキ(潜) …… 『日本書紀』神代卷諸本●<sup>22)</sup>

『日本書紀』人皇巻諸本○○○、○○●<sup>23)</sup>

⑩ナジリ(詰) …… 観智院本『類聚名義抄』○○●

⑪ホセキ(防) …… 図書寮本『類聚名義抄』○○●

御巫本『日本書紀私記』○○●

⑫モヂフ(捫) …… 御巫本『日本書紀私記』○○●

乾元本所引『日本書紀私記』○○●

⑬ハゲシ(慷慨) …… 御巫本『日本書紀私記』○○●

乾元本所引『日本書紀私記』○○○

以上に挙げた⑥⑧⑨⑩⑪⑫⑬には、アクセント体系変化以前の例に○○●型が見られ、○○●↓○○○の変化の過程を反映していると考えてよいだろう。なお、⑪の図書寮本『類聚名義抄』および御巫本『日本書紀私記』の例は、「フセク(フセク)」の例である。

⑦の「モダサ(黙)」については、金田一春彦氏は、

モダスが『図書寮本・類聚名義抄』で(上)平平軽型に表記されている例がある。<sup>24)</sup>

とされる。「モダサ(黙)」の三拍目の上声点は、音韻変化によって平声軽点であったものが上声点に加点されたものであると考えられよう。<sup>25)</sup> よって、見かけ上は○○●↓○○○の変化過程である●○○●



と同じ型を示しているものの、実際には○○●↓●○○○の変化過程を示す例ではない。

(3) ●○○○(変化後)

○○●↓●○○○の体系変化が完了したと考えられる例には、次のようなものがある。

- ⑭ウマシ(可怜)「下47ウ2」、⑮ツドへ(集)「下39オ6」、⑯トボス(一片之火)「上41ウ1」、⑰メグシ(憐)「下44ウ4」、⑱トリシバリ(急握)「中2オ4」

(以上五例)

これらの例は、次のようである。

- ⑭ウマシ(可怜) ……御巫本『日本書紀私記』○○●<sup>26</sup>  
⑮ツドへ(集) ……観智院本『類聚名義抄』○○●

乾元本所引『日本書紀私記』○○●  
御巫本『日本書紀私記』○○●、○○●<sup>27</sup>

- ⑯トボス(一片之火) ……御巫本『日本書紀私記』○○●

『日本書紀』神代卷○○●<sup>28</sup>  
……観智院本『類聚名義抄』○○●

乾元本所引『日本書紀私記』○○●  
御巫本『日本書紀私記』○○●

- ⑰メグシ(憐) ……観智院本『類聚名義抄』○○●<sup>29</sup>

御巫本『日本書紀私記』○○●  
『日本書紀』人皇卷○○●<sup>30</sup>

- ⑱トリシバリ(急握) ……観智院本『類聚名義抄』○○●<sup>29</sup>

- ⑭⑮⑯⑰の例は○○●↓●○○○の変化が完了した例と考えてよい

だろう。⑱の例は複合語かもしれないが断言はできないものの、挙げた諸資料と『日本書紀抄』本文傍訓の声点との比較から考えるに、○○●↓●○○○が完了した例とみてよいのではないか。

よって、『日本書紀抄』には○○●↓●○○○について、変化の過程を示す●○○型と変化の完了した●○○○型の両型が存在する。

○○●↓●○○○の変化過程であるとされる●○○型は、桜井茂治氏によれば中世アクセントの中期にあたるものであるとされる。桜井氏は中世アクセントの中期は室町時代初期、一五世紀の初めごろとされ、この時期に○○●↓●○○●が起ったとされた。

しかし、金田一春彦氏は文永年間にはじまった(「伝遺教経」に●○○を思わせる曲調がついていることを指摘される。秋永一枝氏は、古今集諸本から考える変化型から、動詞や形容詞はアクセントが一斉に変化し、名詞では南北朝以後よりももう少し早い時期に〔平平上〕から〔上平上〕への個別的な変化が始まったものであるとされた。<sup>34</sup>

坂本清恵氏は、一三六三年生まれの世阿弥自筆能本の声点と胡麻章は、アクセント体系変化が完了したアクセントを反映していることを指摘した。<sup>35</sup>さらに坂本氏は、一三四三年生まれの長慶天皇はアクセント体系変化後のアクセントを習得していたことも指摘している。<sup>36</sup>

『日本書紀抄』本文傍訓の声点のうち新しい声点は、古く○○●型であった語が●○○と●○○○型を示しており、アクセント体系変化は完了していない。アクセント体系変化が完了したアクセントをもつ世阿弥や長慶天皇の言語形成期を考えるに、『日本書紀抄』本

文傍訓の声点のうち新しい声点は、鎌倉時代後期頃のものであると考えることが可能であろう。

本稿の筆者は、『日本書紀抄』所引の『日本書紀』本文に加点される字音点のうち、仮名音注は鎌倉時代中期から後期の字音を反映していると考えたことがある。<sup>(37)</sup> 本稿で得られた結果は、このこととも一致する。

これらより、内山論文で指摘される「新しいアクセント体系」の声点は、宣賢が移点するため参照した原本に振り仮名を加えた者の、鎌倉時代後期のアクセントを反映していると考えられる。

#### 四、むすび

以上、『日本書紀抄』本文傍訓の声点について、先行研究で指摘された「古いアクセント体系」と「新しいアクセント体系」の二種を手がかりとして、(1)語頭低拍連続を保持する例と(2)○○●●↓○○○の例を検討した。その結果、「古いアクセント体系」を示す声点は『日本書紀』古写本に古くから伝わる声点を移点したものであり、「新しいアクセント体系」を示す声点は、宣賢が依拠した原本に振り仮名などを加点した者の、鎌倉時代後期のアクセントを示していると考えた。

注

(1) 「後抄本」は小林千草による呼称であり、清原宣賢自筆『日本書紀抄』（請求番号二一〇・一一イ一五一）大永六・七

(一五二六・一五二七)年写をさす。『日本書紀抄の国語学的研究』（一九九二年、清文堂出版）二二二頁参照。

(2) 鈴木豊『日本書紀』神代巻の声点』（『国語学』一三六 一九八四年三月、国語学会）

(3) 「乾元本」は、天理大学附属天理図書館蔵下部兼夏筆。乾元二（一三〇三）年写。

(4) 『日本書紀抄』には『日本書紀』の歌謡のうち一番歌から六番歌が存在する。この歌謡に加点される声点は鈴木論文の(a)に属する。この一番歌から六番歌の声点を鈴木豊編『日本書紀神代巻諸本声点付語彙索引』（アクセント史資料研究会、一九八八年）によって諸本と対照すると、次に挙げる例を除き、すべて他本に一致例が見られた。平声点を○、上声点を●、去声点を●で示す（以下、本文においても同様）。

#### 《一番歌》

多磨迺弥素磨屢迺阿奈陀磨波夜

書紀抄本 ○○○○○●●●○○○○○●

図書寮本 ○○○○○●●●○○○○○●

乾元本 ○○○○○●●●○○○○○●

明徳本 ○○○○○●●●○○○○○●

この例は、移点の誤りによって生じた一字分のずれであろう。

また、『日本書紀抄』上巻・中巻（神代巻上）に八四例、『日本書紀抄』下（神代巻下）に四二例ある訓注の声点も(a)の声点に属する。これは、全て他本と一致した。

(5) 『日本書紀』諸本におけるこの傾向は、前掲注2鈴木論文で

指摘されている。『日本書紀抄』での同様の傾向は、坂水貴司「清原宣賢自筆『日本書紀抄』(後抄本)の漢字音—本文と注釈との比較から—」(『論叢国語教育学』復刊第三号 二〇一二年七月、広島大学大学院教育学研究科国語文化教育教育学講座)で指摘した。

(6) 本文の漢字に●●●○を示す声点が加えられる「句々廻馳」「上28才10」は、傍訓では○○○○●●を示す声点が加えられる、というような例である。

(7) 表の書式は、金田一春彦『四座講式の研究』第四編第三章(金田一春彦著作集五 二〇〇五年、玉川大学出版部)などを参考にし、私に作成した。

(8) 内山弘「清原宣賢自筆『日本書紀抄』所収『日本書紀』神代卷傍訓の声点」(『語文研究』六六・六七 一九八九年六月、九州大学国語国文学会)

(9) 早くは金田一春彦「古代アクセントから近代アクセントへ」(『国語学』二二 一九五五年九月、国語学会)による調査で述べられている。また、アクセント体系変化の全体的な様相を扱った坂本清恵「中近世声調史の研究」(二〇〇〇年、笠間書院)第四部「体系変化の前後におけるアクセント体系について」(初出、「体系変化の前後におけるアクセント体系について」(『日本語アクセント史総合資料 研究篇』一九九八年、東京堂出版))も、この式の交替を手がかりとして、アクセント体系変化の様相を明らかにしている。

(10) 卷第二奥書に「弘安九年春比重加裏書了」とある。

(11) 用例の取り出し方は、原則的に前掲注4鈴木豊編『日本書紀神代卷諸本声点付語彙索引』に依った。ただし一部、私に取り出し方を変えたものがある。このような方法をとったため、注8内山論文における用例の取り出し方とは異なっている。

(12) 「ホトリバ(雄柱)」「上41才10」という例が存する。この例は二字目の「ト」に加点される声点が中位(ト字の交わり部分の高さ)に差されており、○●●●とも○○○○の両者の可能性が考えられる。そのため、本稿における考察では除外する。内山論文では○●●●と判断している。

(13) 乾元本の「イロト」に加点される声点のうち、「イ」字に加点される声点は線点であり、「ロト」に加点される声点は星点である。

(14) 明德本の例は、複点のみが「ヒ」字に加点された「×●×」が取り上げられている。しかし、このような形は濁点であるか濁声点であるかの判断が難しいため、採らなかつた。

(15) 明德本別所である卷第一・二六才4に、「○○○○●●○○」の例がある。

(16) 秋永一枝「古今和歌集声点本の研究 研究篇上」(一九八〇年、校倉書房)二五八頁参照。

(17) 注16秋永著書、一九七・一九八頁参照。

(18) 注16秋永著書、三四五頁参照。

(19) 鈴木豊「日本紀講書とアクセント—『日本書紀』声点本の成立に関する考察—」(『論集VI』二〇一〇年十一月、アクセント史資料研究会)

(20) ただし、この例は卜部兼右が天文九(二五四〇)年に書写した天理大学附属天理図書館蔵本であり、書写年代が新しい。

(21) 注16秋永著書、七一頁参照。

(22) 弘安本、乾元本、嘉暦本の三本に、○○●型が見られた。

(23) ○○○型を示すのは、「介豆岐齋奈(○○○○●○○)」の例で、熱田本(永和元(一三七五)年)、兼右本、内閣文庫本(慶長頃写)が該当する。○○●を示すものは、「伽豆區苔利(○○●●●)」の例であり、熱田本、兼右本、内閣文庫本が該当する。また同じ型で、熱田本に「介豆區苔利(○○●●●)」の

例がある。

(24) 注7金田一著書四五九頁参照。

(25) 小松英雄『日本声調史論考』(一九七一年、風間書房)五四六頁参照。

(26) 同じく「ウマシ」の和訓を持つ「可美」「上21ウ」は、『日本書紀抄』をはじめ、弘安本、乾元本で○○○と加点される。

(27) 御巫本日本紀私記の○○●●●例は、「女只津度倍豆(○○●●●)」の例である。

(28) 乾元本における同一箇所例である。

(29) 観智院本『類聚名義抄』は「シバル」の例である。

(30) 「屠利辞魔屢(○○●○○●)」の例で、北野本(当該巻は室町時代写)、熱田本、兼右本、内閣文庫本に見られる。

(31) 『日本書紀抄』では「トリシバリ(××●○○)」と加点される。

(32) 桜井茂治『日本語の音・考―歴史とその周辺―』(二〇〇〇

年、おうふう)二四五頁から二四八頁参照。

(33) 注7金田一著書四一九頁参照。

(34) 秋永一枝『古今和歌集声点本の研究 研究篇下』(一九九一年、校倉書房)、三三四頁参照。

(35) 注9坂本著書第II部第1章、第2章参照。

(36) 坂本清恵『「仙源抄」とアクセント仮名遣い―長慶天皇はわかっていた―』(『国文目白』第四八号 二〇一〇年二月、日本女子大学国語国文学会)

(37) 注5坂水論文参照。

(広島大学大学院教育学研究科博士課程前期)